

歴史はいかに継承されているか—中国における歴史教育について (王 智新)

歴史はいかに継承されているか

— 中国における歴史教育について

The Values of Examining Education History—Focusing on the History of Education in China

王 智 新

As the Confucian maxim "onkochishin"-discovering new things by studying

The past-symbolizes, looking at the history of education in China yields revelations of value. If it is the role of historians to record and criticize the incidents that happened in history, it is the role of historical educators to accurately relate those incidents to the next generation. Education history usually aims not only at providing knowledge of what happened in the past to young people who are taught history, but also at helping them to acquire a recognition of the real society where they are actually going to live and act through that knowledge. In an attempt to free oneself from "the nationalist-viewed history" formed in the 20th century, this treatise tries to grasp how the history should be in the 21st century, employing the education history of China as an example.

With this goal, and taking a broad view of things, we should modestly examine the advantages and disadvantages of the historical traditions that are different from that of our own country and then promote mutual understanding between others and us.

The purpose of teaching about education in China's past is to build historical thinking, to comprehend the rules of social development and to acquire a basic knowledge about historical materialism and dialectic, through understanding the historical process of world formation and through investigating the relations of the countries in the world from various points of view. Since the 1980's, it has been very important to identify and teach the history of one's own country, which is apt to be taken too narrowly, and efforts for that end have been made, by adopting a somewhat broad overview of world history.

Looking back on the development of education in China, I try to analyze how the Chinese people recognize or become aware of history. I put this into practice by researching today's situation; periodization of world and Chinese history; the curriculum; the purposes and expectations; the system of the textbooks used; and the relationship between Japan and China described the textbooks. Through those studies, we can witness a part of the education circumstances in the long and proud history of China.

When we try to achieve mutual understanding among countries and peoples, we can appreciate other traditions which differ from that of our own. We can also search for others' merits and demerits in a modest way, and not take an interest only in the historical tradition of our own country.

キーワード：歴史、歴史教育、歴史教科書、歴史教育方法、相互理解、エスノセントリズム

目次

はじめに

I 近代以前の歴史教育について

II 近代の歴史教育について

III 現行の歴史教育について

1966年の「文化大革命」までの歴史教育

「文化大革命」終息後から今日までの歴史教育について

IV 今日の状況と問題点

V 歴史教科書について

VI 中国歴史教科書における日本と日中関係についての記述

終わりに

はじめに

歴史教育は、被教育者である青少年に、過去に生じた事実についての知識を与えるとともに、その知識を通じて、その青少年がやがて活動すべき現実の社会についての、正しい認識が得られるように、手助けをすることを目的としているのが普通であろう。中国の古典にある「以史為鑑」という言葉の通りである。ただし、その現実の社会についての認識とされるものの内容は、国により、また民族によって、それぞれ異なっており、一律にどれが正しいといえるような共通の基準があるわけではない。つまり、それぞれの国や民族には、固有の価値意識というものがあるのであって、その価値意識に基づいて、歴史が叙述され、それによって歴史教育が行われるのであるから、価値意識を異にする他者の立場から、その歴史教育の内容乃至方式について、軽々しくこれを批判することはできない。

しかし、批判ではなく、他国や他民族との相互理解を目指す場合にも、その国の歴史の上で重要と見なされている事実や、それを重要と見なす価値意識について、ある程度の理解がなければ、十分な相互理解は達成されないであろう。

中国において世界史教育の目的は世界の形成の歴史的過程を理解し、世界諸国の関連を多角的に考察することを通して、歴史的思考力の養成、社会発展の法則の把握と、歴史唯物論と弁証法について初歩的な知識を得るにある。そして、八〇年代に入ってからは、とかくエスノセントリズムによる偏狭な歴史認識に陥りがちな自国史を世界史の統一的把握によって、正しく認識し教育することも重要な課題となってきた。

日本と中国との間相互理解は容易できるように見えても、実は必ずしもそうではないようである。自国民のためだけの歴史教育であれば、外部からの批判や説教は必要がないとしても、グローバルゼ

ーションが叫ばれる昨今、他国や他民族との相互理解を目指すのであれば、自国に固有の歴史伝統だけに視野を限定することなく、他国や他民族にはそれぞれ独自の歴史的伝統があることに注目し、自国と異なるその歴史的伝統について、その長所と短所とを謙虚な態度で探求することが望まれるのであろう。

I 近代以前の歴史教育について

中国は歴史の国と言ってもいいほど、歴史についての記述・研究が長い歴史を有している。イギリスの学者ジョセフ・ニーダム（Dr. Joseph Needham, 1900-1995）は中国の科学技術史を研究して、次のような結論を出している。「中国の‘科学王’は神学でもなければ、物理学でもない。それは歴史である。」①

文字で記録される歴史は殷朝（紀元前1400年ごろ）まで遡れる。殷朝の史官は亀甲獣骨に当時の社会と生活状況を刻んでいたもので、それは貴重な史料として、二十世紀始めに発掘され、解読された。殷朝以降、歴代の王朝に歴史を掌る役職が設けられ、その時代に起こった大小さまざまな事件を克明に記録するようになった。しかし、いわゆる文史一体の時代が長く続いた。つまり、『尚書』、『左伝』、『春秋』等のように、歴史書であると同時に、文学書でもある、歴史と文学が渾然として一体化していた。歴史書を編纂する目的は政権の正統性を後世に知らしめるものであるから、教育ということになる。史官が自ら教師となり、貴族子弟の教育に当たっていた。「以吏為師」（官吏を教師とし）、「学在官府」（学問は役所にて行われる）とは、当時の状況を物語っている。

春秋戦国（紀元前770年—前403年）になると、奴隷社会が崩壊し、文化教育も官府から解放されて民間へと広がった。新興勢力の代表として孔子ら私学を興し、学校教育民営化の時代が始まった。孔子は儒学の立場から教材となる歴史書等の添削を行い、『詩』、『書』、『禮』、『易』、『樂』、『春秋』が「六芸」といわれるものを、弟子たちの教育に使用したのである。これらは後に『論語』と並べられ、儒教最高の経典とまで崇められる。『書』とは、『尚書』のことで、「書経」ともいわれ、舜堯から秦穆に至るまでの政治史・政教を記した最古の史料集である。最初は魯の国の史官の手によって編まれた『春秋』は、魯の隠公元年（紀元前722年）から哀公十四（紀元前481年）に至るまでの242年間の事跡を編年体に記したものである。孔子が筆を加えたので、褒貶の意を寓するものになった。『尚書』と『春秋』は中国最初の歴史教材とも言われている。庄子が『天下篇』で、「『書』以道事、『春秋』以道名分」。（「尚書」を以ってことわりを語り、「春秋」を以って名文を説明する）と言っている。『尚書』と『春秋』を教材として使用して教育を行う孔子には、独自の政治目的と明確な教材基準とがあったはずである。つまり、支配階級の政治思想と道徳基準を以って弟子たちを支配的な人材に養成しようとしたのである。

重臣董仲舒の「罷黜百家、独尊儒術」という建言を聞き入れた漢の武帝は、『詩』、『書』、『禮』、

『易』、『春秋』を「五経」として持ち上げて、太学の教科内容として指定し、それを専門とする「五経博士」というポストを設けた。五経を専門として研鑽する学問—経学が生まれ、五経の文義に通曉する学者が選りすぐられて「五経博士」に任じられ、弟子の教育、指導に当たった。儒教が支配的なイデオロギーになったため、老子、庄子など他の学問は退けられ、歴史学は経学の付属的なものとしての位置付けしか認められず、歴史教材も『春秋』、『尚書』等だけに限定されてしまった。

隋唐の時代になると、歴史はいつそう重要視され、「以銅為鏡、可以正衣冠、以古為鏡、可以知興替、以人為鏡、可以明得失。」（銅を以って鏡とすれば、衣冠を正すことができ、古を以って鏡とすれば、王朝の盛衰交代を知ることができ、人を以って鏡とすれば、得失を明らかにすることができる。）と、唐の太宗が歴史の重要性を強調した。歴史研究と歴史教育も空前に活発になった。『周礼』、『礼記』、『儀礼』、『春秋左伝』、『春秋公羊伝』、『春秋穀梁伝』、『書』、『詩』、『易』があわせて「九経」と呼ばれ、中央と地方学校教育の必須教材として指定された。科挙試験にも『春秋左伝』、『春秋公羊伝』、『春秋穀梁伝』の「三伝」と史科（『尚書』）の二科が指定科目とされた。

宋朝になると、教育の内容がさらに豊富になり、唐代の「九経」の上に、さらに『論語』、『孝経』、『爾雅』、『孟子』が加わり、「十三経」となった。政府の設置する科挙に応ずる予備門である官学に対して、書院という施設が私学として各地に現れ、著名な学者が子弟を集めてそこで講書、講学する。個人研鑽とグループ討論という新しい教育方法開発された。しかし、宋朝では理学が盛んで、学問の自由は認められず、学者の思考の枠や範囲等も厳重に指定され、一步もそこから外れることは許されなかった。

清朝になると歴史の教材がさらに増え、『資治通鑑』や『史記』、『漢書』等も教材として認められた。そして、経学が依然として支配的な地位を動かさないが、歴史についての重要性も強調された。一部の学校や書院では子どもが15歳までは経学を勉強し、15歳から25歳までは経学のほかに律令制度についての書物を、25歳から35歳までは「二十一史」、経済等の書物も読むように、と決められた。

以上でわかるように、中国における歴史研究及び歴史教育は紀元前から延々と途絶えることなく、今日まで続いてきた。歴史は経学の付属としての地位しか付与されなかったが、中華民族の文化伝統の保持と延長、そして民族の心理と精神の形成の上に大きく影響している。

II 近代の歴史教育について

一九世紀末から二十世紀初頭にかけて、西洋の到来とともに中国の政治経済状況が大きく変化し、教育もようやく近代化しはじめた。

1901年（光緒二十七年）8月、大学士張之洞、劉坤一らの進言に基づき、光緒皇帝は千数百年の歴

史を有する書院制度に終止符を打つ詔書を下した。それによると、全国各省の書院が大学堂に、府庁および直隸省の書院は中学堂に、州県の書院は小学堂にすべて変身した。

1902年に「欽定学堂章程」、その2年後にまた「奏定学堂章程」が公布され、近代中国の学制は次のような三段七級に分けられた。第一段は初等教育とし、一般には蒙養院4年、初等小学堂5年、高等小学堂4年となる。第二段は「高等教育の始めて基礎」である中等教育とし、中学堂4年とする。第三段は高等教育で、高等学堂、あるいは大学予科、分科大学と通儒院があった。学齡児童は七歳から小学に就学してから、最高級の通儒院を卒業するまで、26年間学校生活を送らなければならない。「欽定学堂章程」では歴史教育を「史学」として取り決めたが、「奏定学堂章程」では、「歴史」と改称された。そして、小学堂から高等学堂まですべて歴史の時間が設けられていた。初等教育の小学堂の五年間に、「人生に必要な知識を啓く」という趣旨で歴史科が必須科目として立てられた。さらに、高等小学堂の四年間に、「国民の善性を培い、国民の知識を拡充する」目的で中国史の時間が設けられた。中等教育の中学堂には修身、読経、中国文学、外国語等12の必修科目があり、歴史もその中の一科目である。（表1参照）中学の一年目は中国史；二年目は中国史とアジア各国の歴史；三年目は中国本朝史およびアジア各国の歴史；それから四・五年目は東西洋各国の歴史となった。内容としては、「まず中国史、しかも約百年の間の出来事を中心に教えるべきである。それと同時に、古今忠良賢哲の事跡、學術、技術の進歩、武備の緊張と弛緩、政治の沿革、農工商の発展、風俗の移り変わり等も語らなければならない。」②

（表1）1903年「奏定中学堂章程」歴史科及び課程

| 第一 年 | | 第二 年 | | 第三 年 | | 第四 年 | | 第五 年 | |
|------|-----|---------------|-----|------------------|-----|--------|-----|--------|-----|
| 内 容 | 周 時 | 内 容 | 周 時 | 内 容 | 周 時 | 内 容 | 周 時 | 内 容 | 周 時 |
| 中国史 | 3 | 中国史及び アジア史 | 2 | 中国本朝史と アジア各国史 | 2 | 東西洋各国史 | 2 | 東西洋各国史 | 2 |

（資料出典：『中国近代学制史料』）

次はアジア各国の歴史で、「日本、朝鮮、安南、タイ、ビルマ等の国々の歴史を詳しくし、その他の国々の歴史は簡潔にすべきである。近代、ことにこの50年間の歴史を詳細に、遠い昔の歴史を簡略にし、現代と古代の比例は九対一でよい。さらに、東洋は西洋からの侵略にさらされているという危機状況にあることをはっきり示すべきである。」欧米の歴史については、「大国の歴史を詳細に、小国の歴史を簡略に、近代史特、この50年間の歴史を詳細に、古代史を簡潔にする。」③

高等学堂学科は3種類に分けられる。第一種類、予備科として、経学科、政治科、文学科、商科に進学するもの；第二種類、予備科として、格致科大学、工科大学、農科大学に進学するもの；第三種類、予備科として、医科大学に進学するものとする。各類型科の修学年限はそれぞれ三年を限度とする。そのうち、第一種類学科には歴史科を設け、一年目に中国史；二年目にアジア各国の歴史、三年目に西洋各国の歴史、いずれも周3時間とする。高等学堂を卒業した者は大学堂に進学し、引き続き勉学する。大学堂の専攻カリキュラムは8学科、文科大学9科目で、「中国史学」と「万国

史学」がある。

さらに、「奏定初級師範学校章程」、『奏定優級師範学堂学校章程』、等に見られるように、師範学校にも歴史科が設けられ、歴史に精通する教員の養成に力を注いだ。

辛亥革命（1911年）後、小学の歴史の時間は高等小学に移され、地理と合併され「中華史地」、「本国史地」と呼ばれる。（表2参照）

（表2） 1913年教育部公布「中等学校課程標準」歴史科とその課程

| 第一 年 | | 第一 年 | | 第一 年 | | 第一 年 | |
|--------------------|-----|---------------|-----|---------------|-----|------|-----|
| 内 容 | 周 時 | 内 容 | 周 時 | 内 容 | 周 時 | 内 容 | 周 時 |
| 本国史地 （上古、中古、近古） | 3 | 本国史地 （近現代） | 3 | 東亜各国史、 西洋史 | 3 | 西洋史 | 3 |

（資料出典：同前表）

1922年、教育制度が大きく改革され、「六・三・三制」が実施される。1923年「新学制課程標準綱要」が公布され、初等小学の衛生、歴史、公民、地理を併合して、新たに社会科を設置する。小学の高学年（五・六年）と中学には歴史科が設けられる。中学一・二年次は、中国歴史、三年には世界の歴史；高校一・二年には中国歴史、高三には、ふたたび世界史の時間が設けられていたし、高校では文化史を開設することになる。

1929年8月、教育部が「初級中学歴史暫定課程標準」を公布し、中学歴史教育の目標については次の七点を要求している。「①中国政治経済の変化の概要を研究し、西洋列強から侵略される経過を説明して、生徒の民族精神を煥発させ、民族運動に関する自覚を呼び起こす。②各国の政治経済の変化の概要を研究し、今日に到るまでの国際情勢の移り変わりを説明し、国際問題についての常識を培い、国際的視野と国際同情心を持つように教育する。同時に、国際情勢下の中国の地位を重視し、中国の民族の自衛も忘れないように注意する。③中国と各国の民族学術文化の変化を研究し、現代人類生活と文化の由来を理解させる。④中国および各国の歴代の政治状況を研究し、特に民権の発展に就いて説明し、政治訓練と民権運用の基礎を培わせる。⑤中国および各国の経済状況を研究し、経済状況と社会問題との関連について説明し、民主主義の根源を解き明かせ、民生についての関心と理解を持つようにする。⑥高い情操と人類に奉仕する精神をも持つように、歴史事例を使って生徒の啓蒙を行い、彼らの観察と判断能力を促進する。⑦物質文明と社会の進化に貢献する近代科学について理解させる。」④

数年間の試行を経て、1932年10月、教育部は「中学正式課程標準」を公布し、中等教育段階の中学と高校の歴史科については、正式の決定を下した。1949年の政権交代まで、数度修正を行われたが、基本的に上記の要求通り歴史教育が進められてきた。（表3参照）

（表3） 1932年「中等学校正式課程標準」歴史科及び課程

| 中 一 | | 中 二 | | 中 三 | | 高 一 | | 高 二 | | 高 三 | |
|-----|----|-----|----|-----|----|------------|---------|------------|---------|-----|----|
| 内 容 | 周時 | 内 容 | 周時 | 内 容 | 周時 | 内 容 | 周時 | 内 容 | 周時 | 内 容 | 周時 |
| 本国史 | 2 | 本国史 | 2 | 本国史 | 2 | 本国史 外国史 | 4 /2 | 本国史 外国史 | 4 /2 | 外国史 | 2 |

（資料出典：同前表）

III 現行の歴史教育について

1966年の「文化大革命」まで

中華人民共和国の現行の歴史教育は、共産党が部分地域で政権を樹立したところまで遡れる。1932年の中央ソビエト根拠地に、設置した中央レーニン師範学校においては、9科目が開講され、歴史科は、政治経済学に次ぐ重要な科目として取り上げられていた。小学五、六年から中学一年まで歴史科がある。中学の歴史授業は周3時間で、前期が中国古代史、後期は近代百年の中国史となっていた。さらに1940年代の延安時代になると、中国歴史と中国地理が合併して「史地課」となり、三年制の師範学校では一年と二年目の4学期に配置され、周3時間で行われた。

1949年中華人民共和国成立後、歴史教育もかなり重要視されてきた。1950年8月、中央人民政府教育部が「小学校暫定教学計画（草案）」と「中等学校暫定教学計画（草案）」を打ち出し、歴史科は、中学の一年から高校三年まで配置され、周3時間で、トータル720時間あり、全授業総時間の10.1%を占めた。因みに授業の時間数であるが、中学では国語23.33%、数学15.56%、外国語は歴史と同様10.1%；高校では、国語17.78%、数学16.66%、外国語13.33%、歴史10.1%となっている。これでわかるように、中等教育段階の教育課程には14科目あり、歴史科は国語、数学、外国語に次ぐ重要なカリキュラムである。

小学では四、五年で本国の歴史、中高では一貫して、古今中外の歴史を原則として定めた教育部は、翌1952年、本国歴史の軽視という欠陥に気づき、早速「中、小学校教学大綱（草案）」を公布し、次のように中学の歴史科について内容や時間配分の調整を行った。中学一年；中国古代史、中学二年；前期、中国古代史、後期、世界古代史、中学三年；世界史で、高校一年；世界近代史、高校二年；前期、世界近代史（ソ連現代史）、後期、中国近代史、高校三年；前期、世界近代史、後期、ソ連現代史と改められた。教材もソ連の歴史教科書の中国語訳がそのまま使用された。

1956年に再度改定が行われ、歴史教科書も中国人が執筆するようになった。中央教育部の委託で北京の人民教育出版社が「中、小学校歴史教学大綱（改訂草案）」を制定し、学校用歴史教科書並びにその参考書の執筆、編集にも手がけた。中学一年では中国古代史、中学二年；前期、中国古代史、後期、中国現代史、中学三年；世界（古代）史、高校一年；世界近代史、世界現代史、高校二年；中国古代史、高校三年；中国近代史、中国古代史と改定され、中国史、特に中国近現代史に重点が置かれたことがわかる。

1958年から教育改革が進められ、教育内容と授業時間の簡潔化が求められたため、歴史科の時間も大幅に削減され、変動が激しかった。一九六〇年代に入ってから、学制短縮運動が進み、課程の簡潔化が要求され、一時、小中学五年間の歴史科は中学三年の一年間に短縮されることもあった。その流れは1963年の教育課程改訂まで反映されていた。初等教育段階の小学五、六年では、周2時間で、中国歴史で変わらないが、中等教育段階では、中一、高一二年の歴史科の廃止など、大きく変化した。1963年教育部公布の「全日制中小学教学計画」では、中学二年；中国古代史、中学三年；前期、中国近代史、後期、中国現代史、高校三年、世界史となっている。それぞれ周3時間で、総授業時間数の4.7%まで下がった。内容の精選、削減も同時に行われ、中国史と世界史が合併され、60時間用の1冊に合本された。「厚今薄古」（近現代を厚くして、古代を薄くしよう）という方針の下、歴史教育は内容が恣意に変えられた。1966年の夏からは、学校教育と一緒に、完全に停止に追い込まれた。（表4参照）

（表4） 中華人民共和国成立後の中等学校歴史教学大綱（計画）及び課程

| 学年／課程 年代と名称 | 中一 | 中二 | 中三 | 高一 | 高二 | 高三 |
|-------------------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 1950年中学 暫行教学計画 | 本国史 | 本国史 | 外国史 | 本国史 | 本国史 | 外国史 |
| 1952年中学 教学計画(草案) | 中国古代史 | 中国古代史 世界古代史 | 世界史 | 世界近代史 | 世界近代史 中国近代史 | 中国近代史 |
| 1956年中学歴史 教学大綱(改訂草案) | 中国古代史 | 中国近代史 中国現代史 | 世界史 | 世界近代史 世界現代史 | 中国古代史 | 中国近代史 中国現代史 |
| 1963年中学歴史 教学大綱(草案) | | 中国古代史 | 中国近代史 中国現代史 | | | 世界史 |
| 1978年中学歴史 教学大綱(試行草案) | | 中国古代史 | 中国近代史 中国現代史 | 世界史 | | |
| 1986年中学歴史 教学大綱 | 中国古代史 中国近代史 | 中国現代史 世界史 | | 世界史 | | |

（資料出典：『中国教育史年鑑 1949-1981』）

「文化大革命」終焉から今日まで

教育革命を標榜する「文化大革命」は、1976年下半年期ようやく終息した。翌年、学校授業が再開し、教育部は1978年1月に、「全日制十年制中小学各科教学大綱（試行草案）」を公布し、文化教育の重要性を強調した上、歴史科については、「小学では卒業前の最後の年に一年間、」「中学では中国史、高校では世界史」、「中学の歴史授業は周2時間で、二年では中国古代史、三年では中国近現代史、高校一年では世界史で、前期周2時間で、後期周3時間」と決められた。これは、その年の秋に公布された「全日制中学歴史教学大綱（試行草案）」でもう一度確認された。（表4参照）試行を重ね、各地からの意見を集約して、同草案はさらに改訂され、中学二・三年にあった歴史科は全体そのまま中学の一・二年に引き下げられた。

1986年の「義務教育法」実施に伴い、カリキュラムの改正が行われ、同年12月から国家教育委員会（元教育部）が公布した「全日制中学歴史教学大綱」は、「当時現行の1976年大綱に最小限の手

入れをし、1990年代以降の新大綱への移行の準備としての過渡的なもので、高校については一年前期の周時間数を三に引き上げただけで、殆ど手をつけないが、中学一年は周3時間で、前期では中国古代史、後期は中国近代史、二年は周2時間で、前期は中国現代史、後期は世界史に、と大幅に調整した。（表4参照）そして、内容的にも中国現代史の下限を1982年まで、世界史の下限を第2次世界大戦終了後の今日まで引き下げた。

1988年に公布された「九年制義務教育全日制小学社会科教学大綱（案）」では、小学の歴史科と地理科が合併され社会科となり、小学の三年から五年までの三年間で開講し、週2時間である。新設の小学社会課は社会生活、歴史、地理及び法律常識等からなる。

1990年3月、国家教育委員会では「現行普通高校教学計画調整意見書」を出して、高校のカリキュラムを必修と選択に区分し、高校三年次に周6時間の中国古代選択科目、高校の一、二年次にそれぞれ周1時間の中国近現代史の必修科目を配置した。

1992年秋季に入学した新生から「九年制義務教育全日制小学・中学課程計画（試行）」が正式に実施された。「教学大綱」が「課程計画」に名称変更したことについて、国家教育委員会がこう説明している。「清末、科举制度廃止し、学校が設置されてから、中国人民共和国建国まで以来、中国ではずっと‘課程標準’という言葉を使用してきた。中国人民共和国成立後、‘教学計画’を使用するようになった。‘教学計画’はもともと教師の一学期か一年間の授業の目的、内容と進度の配置を意味するが、実際にはすでに学校全体の教育活動の計画にまで拡大された。改名の理由は二つあり、一、今度の‘計画’の核心は課程の設置と課程の構造に限られる。課程構造はいままでと大きく変わった。課外活動も授業の一環として加えられた。職業予備教育が新設のほか、選択科目も大幅に増えた。…教師の組織と指導の下で行われる教育、授業活動もあれば、生徒個人、あるいはグループで主体的に行う自主の学習活動もある。いままでの‘教学計画’の枠を大幅に超越したので、‘教学計画’という名称では適切ではない」と判断して、改名をしたわけである。⑤

新「九年制義務教育全日制小学・中学課程計画（試行）」によると、小学では思想道徳、国語、数学、社会、自然、体育、音楽、美術、労働の九つの科目が開講される。そして、従来の通り三、四、五年次に社会科、中学の一、二、三年次には歴史が配置される。小学の三年間で社会科の総授業時間数は204時間で、中学三年間の歴史科の総時間数は234時間となる。中学一、二年次は中国歴史で、周2時間、中学二年次は周3時間（後に2時間に減少）；中学三年次は世界史で、周2時間となる。高校の場合、必修科目として、一年次は世界近現代史、二年次は中国近現代史で、ともに周2時間、三年次には選択科目として古代史で、周6時間となった。そして、「中国歴史科目に使用する教材として、各地方（省市自治区レベル）では郷土教材および地元の民族教材を独自に編纂し使用することができる」⑥と定め、その量としては10時間を超えない程度とする。ただし、地元の省・市・自治区、直轄市教育委員会の審査を受けなければならない。

1996年5月、21世紀の高校歴史教育を目指して、「全日制普通高校歴史教学大綱（試行案）」が公布された。高校二年次から文科系志望の学生と理工系志望の学生がコース別にクラス換えをする

ということ想定して案出されたもので、高校の歴史科を必修、限定選択、任意選択の三つの科目に分ける。高校一年次に周3時間の中国近現代史を必修科目に、文科系に対応する文科系限定選択には二年次に開講する世界近現代史、(周2時間)と三年次に開講する中国古代史で、周3時間とがある。その他に、任意選択科目として、高校一年次に開講する中国文化史と二年次に開講する世界文化史である。(表5参照)

(表5) 全日制中等学校における歴史教学状況(1996年現在)

| | 中一 | | 中二 | | 中三 | | 高一 | | 高二 | | 高三 | |
|-----------------|-----------------|--------|-------|--------|-----|--------|-----------------|--------------|------------|--------------|-----------|--------|
| 必修科目 | 中国古代史 中国近代史 | 周 2 | 中国現代史 | 周 2 | 世界史 | 周 2 | 中国 近現代史 | 周 3 | | | | |
| 選択科目 (限定と任意) | | | | | | | 中国文化史 | 任意 周 3 | 世界 近現代史 | 周 2 | 中国 古代史 | 周 3 |
| | | | | | | | | | 世界文化史 | 任意 周 2 | | |
| 課外活動 | 歴史に関する趣味を引き出す活動 | | | | | | 歴史に関する趣味を引き出す活動 | | | | | |

2000年6月、「全日制普通高校歴史教学大綱(試案改訂版)」が公布され、上記の1996年公布の試案に修正を加えたもので、2000年9月から実施される。それによると、高校の選択科目にあった文科系限定がなくなり、選択ⅠとⅡと変わった。選択Ⅰは世界近現代史で、選択Ⅱは中国古代史で、文科系志向であろうと、理科系志向であろうと、進路、興味によって自由に選択できるようになった。任意選択科目が廃止され、文化史、地方史等の科目の開講は各高校の自主決定に委ねられるようになった。

各地で積極的にカリキュラムを改革し、教科書の編纂に力を入れるようになり、改革の動きが日増しに盛んになってきた。歴史科の授業はとかく史跡中心、教師中心、暗記中心の退屈なものになりがちであるから、それを打破するためにもさまざまな試みがなされてきた。歴史科を必修、選択のほかに(歴史)活動の時間を設けて歴史についての興味を引き出そうとする試みもある。必修科目では歴史についての必要不可欠な基礎理論と基礎知識を授け、選択では生徒の個性を伸ばし、多種多様な興味や趣味の芽を育てる。活動時間では、歴史に関連する考察、見学、調査、討論、講演、試合、製作などを通じて能力と技能を身に付けさせる。上海市では1999年に「21世紀に向けての上海市中等学校歴史科教育改革行動綱領」を打ち出し、「生徒の発展を基本に歴史教育を実施し」ようとして、歴史科をより勉強しやすくする一連の改革プランを発表した。歴史科は単なる歴史の時間だけでなく、総合学科の内容と結び付けて、小学では、「社会課」という科目で、高校では「社会科学基礎」という時間を設け、歴史教育を文化史、社会史と一緒にして行い、生徒たちの興味を引き出そうとしている。さらに、中国史、外国史という伝統的な分類の方法にもメスを入れて、中国史と外国史とを織り込んだ新しい歴史教科書の作成も試みている。(表6参照)北京市も同じく

歴史はいかに継承されているか—中国における歴史教育について (王 智新)

1999年に「歴史課程基準」が公布され、「生徒の人文科学教養を高め、能動的に勉強しよう」⑦に、と高校三年次では「中外文化史」と新しい科目を設けたりして、歴史教育の改革を実践している。

(表6) 上海市のカリキュラム改革案(歴史科)

| レベル | | 九年制義務教育階段 | | | | | | | | | 高校階段 | | |
|-------------|-----|--------------|---|-----|---|---|---|-------|-------|-----|------------|----|----|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 1 | 2 | 3 |
| A 試 案 | 必修課 | | | 社会科 | | | | 中国古代史 | 中国近代史 | 世界史 | 近現代の中国と世界史 | | |
| | 选修課 | | | | | | | | | | 歴史 | 歴史 | 歴史 |
| | 活動課 | 周 10 ~ 12 時間 | | | | | | | | | 周 6 ~ 8 時間 | | |
| B 試 案 | 必修課 | | | | | | | 社会科 | 社会科 | 社会科 | 社会科学基礎 | | |
| | 选修課 | | | | | | | | 歴史 | 歴史 | 歴史 | 歴史 | 歴史 |
| | 活動課 | 周 10 ~ 12 時間 | | | | | | | | | 周 6 ~ 8 時間 | | |

IV 改革の動向と問題点

今日の状況

授業時間；中国では三年前から完全に週休二日制になった。最近では宿題が多くて、生徒児童の負担が重過ぎるから、ノーホームウォークデー設定等の対策が取られている。

小学、一時間の授業は45分で、年間授業時間の配分は学校伝統活動1週間、社会実践活動1週、休みなど13週、教室での授業は34週で、期末復習・テスト2週間、機動時間1週間となっている。

中学、一時間の授業は45分で、年間授業時間配分は、学校伝統活動1週間、社会実践活動1週間、期末復習、テスト3週間、教室での授業時間は34週間で、機動時間1週間となっている。

高校は中学校とほぼ同様で、社会活動など4週間で、休みは12週間となる。

中学と高校の重点が違い、中学では歴史の史実について学ぶことが主であるに対して、高校では、史実をさらに掘り下げて勉強するとともに、歴史認識と史観の形成が主である。

1988年の改正で小学の歴史という科目こそ廃止されたが、歴史科の時間は却って増えている。さらに中学では三年間すべて歴史の時間が配置されたので、歴史科が大幅に増強された。「六・三制」の中学三年間では234時間、「五・四制」の中学四年間では238時間で、八〇年代までの170時間よりそれぞれ「六・三制」では64時間、「五・四制」では68時間増となる。内容について、古代史と近現代史の割合は、古代史が五分二対、近現代史は五分の三を占めている。

高校では一年次に必修科目として歴史中国近現代史で、周3時間、全部で105時間である。文科系限定の選択科目として、二年次には世界近現代史、周2時間で、全部で70時間；三年次には中国古代史で、周3時間で、全部で78時間となる。理工系を対象とする任意選択科目としては、一年次

に中国文化史、全部で35時間、二年次では世界文化史で、全部で35時間である。世界古代史と世界近現代史の割合は、古代史が5分1で、近現代史は5分の4を占めている。

歴史、特に近・現代史教育の目的

小学新設の社会科の目的と基本要​​求：生徒がよく見られる社会の事物と現象について触れ、故郷、祖国、世界の歴史、地理と社会生活等面の常識を初歩的に理解すること。社会を観察し社会生活に適応する能力を初歩的に培い、愛国者義教育と法制概念についての啓蒙を受ける。

中学歴史科の目的と基本要​​求：中国史（郷土史を含む）と世界史の発展の基本的な流れを知ること、中国近現代史上の重要な事件と重要な人物について重点的に学び、愛国主義と社会主義、国際主義についての教育をし、歴史唯物弁証法の基本的観点をを用いて問題を分析する力を養成する。

高校の歴史科の目的と要​​求：生徒が人類社会発展の法則について、さらに一步深めて認識し、世界発展の法則を理解すると同時に、中国の状況をもっと深く了解し、社会主義を熱愛し、中国特色のある社会主義建設の自信をさらに固める。歴史についての基本知識を把握し、歴史の事件と人物を熟知した上、歴史唯物論の基本観点を身につけ、問題を観察し分析する方法を学ぶこと。と同時に、社会発展の法則、革命伝統、愛国主義と国際主義の教育を行い、社会主義祖国への熱愛と社会主義事業と共産党を熱愛する気持ちを養成し、歴史上の優れた人物の高尚なる品格に学び、社会主義近代化建設に貢献する精神の樹立を目標とする。

教科書編集の目的では、学生の素質を高めることを主眼とする。中国の近現代史と中国の国情教育を通じて、祖国の熱愛、中国共産党の熱愛、社会主義の熱愛と「四つの基本原則の堅持」（社会主義道路、プロレタリアート独裁、共産党の指導、マルクス・レーニン・毛沢東思想）について学生に教える。学習者の能力養成と基礎知識教育に力を入れ、知識面を拓けようとする。

歴史の時代区分

世界史の教科書は人類の誕生からナイロ川流域、メソポタニア、インダス川流域、黄河流域など上古時代から普仏戦争までは上で、第一次世界大戦から今世紀90代の冷戦の終結までが下となっている。

中国史四冊のうち、一、二冊は古代史、三、四は近現代史に当てられている。第三冊は清朝から国民革命の失敗まで全32課から構成されている。清が全国政権を掌握し山海関から北京に入りしてからアヘン戦争前夜までの古代史部分とアヘン戦争勃発から蒋介石が国民革命を裏切り、「四・一二クーデター」を起こすまで（1644-1927年）の近代史の部分である。

第4冊は南京国民政府の樹立から文化大革命の終焉と改革開放まで、全32課から構成される。

歴史はいかに継承されているか—中国における歴史教育について（王 智新）

1927年4月、南京に国民政府の樹立から1949年4月、人民解放軍が南京を占領するまでの中国近代史部分と1949年の中華人民共和国の樹立から八〇年代までの現代史部分である。

①世界史

上古時代：原始社会・人類の起源—古代ローマ帝国の崩壊（—DC3世紀まで）

中古時代：ゲルマン民族の勃興・西欧各国封建制度の確立・ドイツの宗教改革と農民運動、スペイン帝国の衰退（DC3世紀—16世紀末まで）

近代：17世紀のイギリスブルジョア革命—ロシアの十月革命（17世紀—1917年）

現代：ソ連邦の樹立—七〇年代の第4次中東戦争・第三世界の勃興・米ソ両超大国の覇権争い、植民地体制の崩壊・アジア経済発展・東欧の激変とソ連邦の解体・世界情勢の多角化・世界経済発展

②中国史：

古代：原始社会・奴隷社会・封建社会—清朝の隆盛（—1840年代）

近代：アヘン戦争—国民党政府が台湾へ亡命（1840—1949年）

現代：中華人民共和国の樹立—今日（1949年—）

V 歴史科授業に使用する教科書

近代歴史教科書の変遷

近代中国最初の教科書は1897年南洋公学外院師範科の陳樊治等が執筆する『蒙学課本』である。翌1898年、丁宝文、呉稚暉等の編纂する『蒙学読本』が出版された。「蒙学」とは啓蒙的という意味で、小学低学年を対象に編纂された教科書という点では、『蒙学課本』も『蒙学読本』も同様で、国語、歴史、地理等の科目の内容が混在していた。『蒙学読本』の第7編に『史記』、『漢書』から取った文章が配列されている。1902年に文明書局から再版され、人気を呼び、短い期間内で版を重ね、一時小学の教科書市場を独占するまでになった。1903年、商務印書館では教科書編集に着手し、蔡元培が編訳所の所長に就任し、国語、歴史、地理をそれぞれ1冊にする編集方針まで決めたが、実際の編集作業に取り組むことができなかった。1903年新しい学制の実施で教科書への要望が急に高まった。丁宝文の『蒙学中国歴史教科書』（上海文明書局、1903年）、姚祖義の『中等小学中国歴史教科書』（商務印書館 1904年）等がよく使用された。中学の歴史教科書の編集が間に合わないで、臨時に日本人桑原鷺蔵の『支那史教科書』と辻安弥の『西洋史』を代替教科書として使用した。1905年に夏曾佑の『最新中学中国歴史教科書』が出版された。日本留学中の曾化鯤が中心とした「東新訳社」のメンバーが編纂した『普通中学教科書—中国通史』は当時で評判のかなり高いものであった。

1911年辛亥革命以後、教育部は通電を発表し、「共和の趣旨にそぐわない教科書の内容について

はすべて訂正すべきである」⑧と要求した。爾後、多くの教科書が発行された。中でも「共和国新教科書」と銘打って出版された商務印書館の教科書シリーズは、「分かりやすく、図や写真、年表もあり、データが豊富で、使用しやすい」⑨ということで、人気を博した。『共和国教科書一本国史』は趙玉森の執筆で、政治経済だけでなく、軍事、教育、宗教、民族等についての記述もある。1913年初版して、わずか四五年のあいだ、39回も版を重ねた。

二十世紀初頭、中国では「白話運動」が興り、国語の普及及び書き言葉と話し言葉の統一を目差す運動である。「国民学校と高等小学校から始めよう」という呼びかけに応じて、商務印書館や中華書局等の出版社が率先して白話文の教科書を出した。呂思勉の『自修適用白話文本国史』（商務印書館 1920年）、顧頡剛の『初本中国史』（中華書局 1921年）等はその代表である。

1930年代の歴史教科書は当時の中国の国情を反映して、愛国主義を煥発するものが多かった。何祖沢の『初中本国史』（新亜書局 1932年）は、「九・一八事変」（満洲事変）以来、中国人民の抗日闘争を重点的に取り上げ、「暴日の東北占領」、「暴日の上海蹂躪」という項目を付けた。姚紹華の『修正課程標準適用初中本国歴史』（中華書局 1937年）では、第4冊の「最近の中日交渉」節で、「現在の中日交渉は単に東北四省の問題だけではなく、全中華民族の存亡に関わる大問題となった」⑩と学生の愛国心に訴えている。

「教学大綱」と「一綱一本制」

1949年に成立の中華人民共和国の教科書編集は、1953年頃からスタートしたのである。1954年に北京教育部直属の教科書専門出版社である人民教育出版社が設立され、全国各地から教科書執筆の専門家が集められた。

ソビエトの影響で中国では従来「一綱一本制」という事実上の国定教科書制度が採られていた。つまり、一つの大綱、一種類の教科書という意味で、網とは「教学大綱」のことで、中央教育行政である教育部の権限において策定し頒布するもので、日本の学習指導要領に相当するものである。上記の人民教育出版社が歴史科の教学大綱の作成、歴史教科書およびその参考書の編纂、出版と発行を一手に引き受けて行ってきた。人民教育出版社で発行された教科書は全中国各地で使用され、それ以外の教科書、参考資料の編集、発行は1980年代後半まで一切禁止された。人民教育出版社が成立してから1990年代まで、国語、算数、生物、化学、音楽等中小学校用教科書を8セット出しているのに対して、歴史教科書はその半分の四セットしか編纂できなかった。これは歴史教科書編纂の難しさを如実の物語っている。

1956年に人民教育出版社編の最初の歴史教科書が発行された。小学五・六年用4冊、中学一・二・三年用6冊、そして高校一・二・三用6冊で、計16冊であった。

1962年「歴史教学大綱」の改訂が行われた。それに基づいて、1963年9月の新学期に合わせて新編歴史教科書が用意された。国境、民族等敏感な問題に大変神経を使いながら編纂された第2次歴史教科書は、全国的に使用されることなく、北京と天津の一部の学校で試みに使用されただけで、

文化大革命の烈火に燃やされてしまった。

1978年から徐々に新しい歴史教科書の編纂が始まった。三年かかりで小中高校使用の歴史教科書を全部出しそろうた。このセットの教科書は次の新しい教学大綱の公布まで、なんと14年間も使用されつづけたのである。

「一網多本制」の試み

開放・改革政策の下で、八〇年代の後半から、学校用教科書については、「一網一本制」が見直され、教科書を自由に執筆し、それを審査して合格したものを教科書として認めるという「審定制度」を実施するようになった。上述のように1988年1月に、中国国家教育委員会（当時）は「九年制義務教育全日制教学大綱」（新編大綱と呼ばれる）を決定し、頒布した。各学校で使用する教科書についての採用決定権は、各省・市・自治区（日本の都道府県に相当）レベルの教育委員会が持つことになる。教科書制度も「一網多本」制へと変わった。つまり、地方教育行政機関は上記の「教学大綱」（一網）に基づいて、地方の実状を考慮した上で、教科課程の基準を決めて教科書を編纂したり、個人やグループの執筆による教科書を審査したりすることができるようになった。

1987年10月、北京の中央の教育部には教科書の検定を行う専門の委員会—「全国中小学校教材審定委員会」が設けられた。中小学校の教学大綱及び教科書、参考書、授業用補足材料、教学用音響・映像資料、コンピューター教育用ソフトなど、学校教育に使用されるあらゆるものはすべて審査の対象となる。同委員会と同時に、漢字以外の文字で書かれた少数民族の教科書を検定する「全国少数民族教材審定委員会」も設置され、「全国中小学校教材審定委員会」の指導を受けて、検定活動を展開する。

上記の二審定委員会の下に、教科ごとに教科教材審定委員会があり、それぞれ主任一人、専門委員5人ないし11人から構成される。委員の任期が三年で、再任は妨げない。委員の交代は三分の一ずつ行われる。

教科書の執筆者についての規定はないが、地方、学術団体、研究所、教員、誰でも教科書を執筆することができる。学者、現場の教師と出版社のプロの三者共同執筆が薦められる。中央各省庁の教育担当セッション、地方教育委員会の許可を経て教科書を執筆することができる。国家の教育方針と国家頒布の教学大綱に基づいて編纂された教科書は、最低一巡の試用を経て、「全国中小学校教材審定委員会」あるいは「全国少数民族教材審定委員会」の検定を受けることができる。審定を申請する場合、試用報告書、実験レポートと地方教育委員会の推薦報告書を付けることが必要である。

審査を受けて、合格したものは「国家教育部00教材審査委員会認定（推薦）」本として出版され、全国範囲の採用に供される。地方では省・市・自治区レベルの教育委員会は、それぞれ所轄範囲内で使用する教科書、郷土教材、補足資料、参考書などを審定する権限をもっている。さらに、地元で執筆される教科書について審定し、新編教材の試用の可否を決定する。地方の教育行政機構である教育委員会には「00省（市・自治区）中小学校教材審定委員会」が設けられ、中央の教学大綱

に基づいて、各地の教学大綱を制定し、教科書検定の任に当たっている。検定にパスし合格したものは「00省（市・自治区）教育委員会00教材審査委員会認定（推薦）」本として、それぞれの省・市/自治区の範囲内での採用に供される。原則的には大学、研究機関、出版社等組織でも個人でも教科書の執筆は認められているが、中国では教科書の個人執筆はほとんど見られない。採用は学校単位で行われるが、地方の区・市・県（日本の市町村に相当）の教育委員会が指導に当たる。基本的には日本の教科書検定制度と変わらないが、地方にも教科書の審査権があるところは中国の国情に因るものであろう。

教育部直属の人民教育出版社と平行して、1983年にカリキュラム開発と研究、教材研究、編纂の専門研究機構として、課程教材研究所が誕生した。人民教育出版社のスタッフが同研究所の所員を兼ねているし、人民出版社のビル内に研究所を構え、看板も並んで掲げられている。成立して以来、課程教材研究所は、それまで人民出版社の業務の一部、つまりカリキュラム編成と教科書の研究開発教科書、執筆を引き継ぎ、担当している。

各地にも北京のそれと同じような教育出版社や研究機構があり、地方の業務を担当している。しかし、カリキュラム編成どころか、教科書編成さえできない地方が多い。そのようなところでは、北京の人民教育出版社から教科書の版型をもらって増す刷りして、地元の学校に供給していたのである。前述のように現行制度の実施までは、教科書の編集・出版はすべて国家（教育部）の一手によって行われてきたので、急に教科書の編集を負かされても、教科書編集についてのノウハウや経験を持たないので、独自で執筆しているところはわずか数箇所しかない。現在、中国全土では北京の課程教材研究所と人民教育出版社以外に、教科書を編集し出版しているところは、北京師範大学、四川省教育委員会と西南師範大学、広東省と華南師範大学、上海市教育学院（1999年に華東師範大学に合併）の五ヶ所ある。その他に、湖南省教育委員会や吉林省教育委員会のように、歴史教科書1から4までのセットではなく、中学の教科書とか、高校の教科書の一科目だけ独自の力で編纂しているところもある。歴史科教科書の中でも、北京の人民教育出版社の教科書が全国で8割以上のシェアを占めている。

現在使用している歴史教科書は、中学段階では「六三制」学校用と「五四制」学校の用の二種類で、それぞれ中国歴史四冊と世界史二冊ある。高校では『中国近現代史』上、下2冊、『中国古代史』（選択用）1冊、『世界近現代史』上、下2冊で、中高合わせて計11冊である。1989年末に編集完了のこの歴史教科書は、実験本として、1990年からまず北京市崇文区、遼寧省鳳城県、河北省裕田県の学校で試用した。さらに試用学校からの意見に基づいて改訂したものを試用本として、全国28箇所、拡大して試用してもらった。全国の試用学校からの意見を集約して、再度改訂して、改訂本として1993年秋から正式に全国使用となった。試用しながら各地からの意見に耳を傾けて、1996年と1998年に2度にわたって大幅な改訂を行って、今日まで到っている。⑩

なお、2000年秋季からは新しい教育大綱の試用改訂版が公表され、逐次実施される。「九年制義務教育全日制普通小学歴史教学大綱」、「九年制義務教育全日制普通中学歴史教学大綱」、「全日制普通高校歴史教学大綱」にあわせて、新しい教材の編集がすでに始まっている。それが一部の地域に限定して試用され、数回の改定を経て、正式なものとして確定される。

VI 中国歴史教科書における日本と日中関係についての記述

他の外国と比べれば、日本についての記述は中国の歴史教科書で大きなウエートを占めている。古代、近代と現代に分けて、その記述を整理してみよう。

『中国歴史』第1冊には、徐福東渡について、次のように記述している。「伝説によると、秦の始皇帝が海へ仙薬を探しに徐福を派遣した。童男童女数千人を率いて、徐福は日本に着いたという。日本には徐福の墓跡が遺されている。」^⑫

『漢書』、『後漢書』、『三国志』等中国の歴史書にも、日本の状況や中国と日本との経済文化交流についての記録がある。第1冊には、これらの記述に基づいて、東漢の光武帝が日本の倭奴国王に贈った金印の件について触れ、日本ではまた東漢の銅鏡が発掘されたとして、金印と銅鏡の写真を挿入した。^⑬

隋唐時代は中日両国の交流の一番輝かしい時期で、『中国歴史第二冊』では、隋・唐時代の中日間の政治、経済、文化交流について、「善隣友好」の基調で、遣隋使、遣唐使、唐の日本への使節の派遣、安部仲麿、鑑真東渡、さらに建築のスタイル、飲食も含まれた。鑑真の写真と奈良平安京の平面図、及び日本で発掘された唐の開元通宝と中国で発掘された日本の「和同開珎」の写真も載っている。同じ頁に李白と郭沫若の詩も収録されている。唐代詩人李白は長安に留学中の阿部仲麿と交友し、安部が帰国する途中、安南あたりで台風に遭い、船が難破したというニュースが長安に伝わると、故人を偲んで李白が哀悼の詩と作った。「日本晁卿辞帝都、征帆一片送蓬壺。明月不歸沈碧海、白雲愁色滿蒼梧。」（李白）「鑑真盲目航東海、一片精誠照太清。捨己為人伝道義、唐風洋溢奈良城。」（郭沫若）^⑭元末・明代の倭寇等が記述されている。そして高校選択科目歴史に使用する『中国古代史（選択）』には、「唐と日本の往来」という節の中で、唐代における中日交流及び日本文化への唐文化の影響について述べられている。

近現代史について

前述のように、近代の時代区分については、中国では世界史と中国史にそれぞれ異なる2通りの基準が用いられる。世界史の時代区分は、1640年のイギリス産業革命を近代の上限とするのが大方の見方であるが、中国近代史は、1840年のアヘン戦争を上限にする方が有力である。

『中国歴史』第三冊

第11課、一九世紀末の中国国境危機と中仏戦争・一九世紀七〇年代・日本の台湾出兵

第12課、甲午戦争と民族危機の深刻化・戦争の起因、経過と「馬関条約」及びそれからの中国国土

の割譲

第15課、義和団運動・ロシア・アメリカ・イギリス・日本・フランス・ドイツ・オーストリア・イタリアの八カ国連合軍の中国侵略

第23課、民族工業の一時的な発展と軍閥の内乱・日本の山東出兵と「二一ヶ条」

第24課、新文化運動と五四愛国運動・「二一ヶ条」全面反対

『中国歴史』第4冊

第 1 課、南京国民政府の樹立・国民政府の「北伐」で日本の済南出兵と済南大虐殺・東北の易旗と皇姑屯事件

第 5 課、日本帝国主義が戦争を発動し中国を侵略する、「九・一八事変」・全国各地で起こる反日運動

第 6 課、抗日救亡運動の高まり、梅津一何応欽条約・西安事変

第 7 課、神聖なる抗日戦争の開始、蘆溝橋事変－南京大虐殺

第 8 課、「敵の後方へ」、共産党の全面抗戦・中国抗日戦争への外国の支援

第 9 課、日本侵略軍の淪陥（占領）地での残虐な統治、広州占領・中国人労働者の強制連行

第10課、抗日に消極で反共に積極的な国民党、南昌占領－国民党の共産党排斥

第11課、後方で抗戦を堅持する共産党、百団大戦（1940年）－延安整風運動

第12課、抗日戦争の勝利

・1931－1945年までの「一五年戦争」について

日本軍国主義の中国侵略については①軍事面②政治面③経済面④文化面の四つの方面から日本軍国主義者の中国侵略事実を挙げて説明している。

・世界史での日本についての記述（歴史専攻及び歴史科担当教員研修用資料による）

中古時代の朝鮮と日本、古代日本、大化改新、武家政治、日本の統一、幕府支配、島原の乱と鎖国政策、幕藩体制の解体

近代史部分：

徳川幕府体制の危機と明治維新、資本主義の発展と軍事封建帝国の形成、自由民権運動と1889年憲法、日本の対外拡張、労働者運動と社会主義運動

現代史部分：

日本のファシズム化、極東地域戦争の発祥地、日本の全面対華侵略戦争の勃発、第2次世界大戦中の日本、日本の無条件降伏、戦後日本改革、サンフランシスコ講和、経済高度成長、経済大国へ変身する日本、教科書問題と軍備・軍事費予算の1%突破

終わりに

以上、歴史を振り返りながら、歴史教育のカリキュラム・趣旨・教科書・歴史の時代区分と中国

の歴史教科書に見られる日本と日中関係の記述を中心に、中国における歴史教育について考察を行った。悠久な歴史を誇る中国における歴史教育の全貌の一角を垣間見ることができたと思う。筆者もそのような教育を受けた人間として、改めてその歴史教育を整理してみることで、いろいろと考えさせられた。最後にそのようなことを踏まえて、感想めいたことを述べて終わりにしたい。

長い歴の中で中国人は自分のことを「中華」や、本国を「天朝」、それ以外の人を「夷狄」、「蕃」や「蛮」と呼んだりして、自国中心主義の伝統は根強くある。その伝統と決別するため、中国の歴史界ではさまざまな努力がなされてきた。世界上のあらゆる民族は大小、強弱の別なく、一律平等でなければならないとし、他民族、他国の長所を取り入れ、自民族、本国の短所を補うという方針も強調された。しかし、そのような伝統の克服は長年たゆまぬ努力がなければ実らないという認識は、『ノーと言えぬ中国』等の書物の流行に現れるナショナリズムの台頭によって確認された。最近公布された「全日制普通高校歴史教学大綱(試案改訂版)」では、「前後の歴史という歴史の内容上、縦の関連性に気を配ると同時に、本国史と外国史の横の関連をも重視しなければならない」^⑤ことを、教師への要望として注意を喚起されている

1949年以降の中国の史学界は、マルキシズムの階級闘争観に支配され続けていた。その結果、歴史はとかく「支配階級」と「被支配階級」、「搾取側」と「搾取される側」等の対立した二分化の構図で捉えられがちで、上古時代の一部例外を除いては、すべて階級闘争史として叙述されていた。近年では、文化史や民族史、民俗史等も重視され、そのような硬直した史観の超越への努力が徐々に現れてきた。そして、郷土史や民族史、文化史、あるいはその他の専門別の歴史等科目の開設決定権も各学校に委ねられている。教育課程については国家規定以外に、地方教育委員会規定と学校規定の三段階から組み立てるような試みも見られる。歴史教育の方法や評価、テスト等、多面にわたって、歴史教育改革の実践が各地で着々と進められ、21世紀ではかなりの収穫が期待される。

(了)

注：

- ①『中国科学技術史・科学思想史』Joseph Needham 著 李約瑟研究会訳 上海科学出版社 1990年 p 236
- ②『中国近代学制史料』第二輯 上冊 朱有猷 師範大学出版社 1987年 P 385
- ③『中国近代教育史資料』中冊 舒新城編 人民教育出版社 1983年 P 457
- ④『中小学課程暫行標準』中華民国教育部 北平 中華書局 民国18 (1929) 年P 4
- ⑤「関于『九年制義務教育全日制小学・初等中学課程計画(試行)』的若干説明」教育委員会基礎教育司 馬立 『九年義務教育課程計画(試行)学習指導』所載 人民教育出版社 1992年 P 89
- ⑥『九年義務教育全日制中学歴史教学大綱(試案)』国家教育委員会基礎教育司制訂

人民教育出版社 1995年 P 5

- ⑦『歴史課程標準』 北京教育科学研究中心 北京出版社 1999年
- ⑧『中国近代教育史』 陳景磐 北京人民教育出版社 1983年 P 202
- ⑨『中学本国史参考書』 趙玉森 上海 商務印書館 1913年 P 3
- ⑩『修正課程標準適応中学本国歴史』 姚紹華 上海 中華書局1937年 P 85
- ⑪ 筆者の課程・教材研究所歴史研究室主任 陳其へのインタビュー 2000年7月
- ⑫『中国歴史』 第1冊 人民教育出版社 1983年 P 114
- ⑬ 同 前 書 P 113-114
- ⑭『中国歴史第二冊』 人民教育出版社 1982年 P 34
- ⑮『全日制普通高校歴史教学大綱（試案改訂版）』 国家教育部基礎教育司編 人民教育出版社 2000年 P 3

参考資料：

- 『中国教育年鑑』 1949年—1998年各号 同年鑑編集部 北京 人民教育出版社
- 『課程教材研究10年』 課程教材研究所 北京 人民教育出版社 1993年
- 『課程教材研究15年』 課程教材研究所 北京 人民教育出版社 1998年
- 『史編拾遺』 蘇寿桐 北京 人民教育出版社 1995年
- 『歴史教材縦横談』 蔵 嶸 北京 人民教育出版社 1999年
- 『歴史文稿選存』 李純武 北京 人民教育出版社 1997年
- 『歴史教学問題探討』 白月橋 北京 教育科学出版社 1997年
- 『歴史教育学概論』 姫 秉新 北京 教育科学出版社 1997年
- 『歴史教育学』 金相成 杭州 浙江教育出版社 1994年
- 『歴史学的思想和方法』 楊豫 胡成 南京 南京大学出版社 1999年
- 『歴史理論與史学理論—近現代西方史学著作選』 何兆武主編 北京商務印書館 1999年
- 『教材論』 曾天山 南昌 江西教育出版社 1997年
- 『中国古代学校教材研究』 熊承滌 北京 人民教育出版社 1996年
- 『教科書の思想 日本と韓国の近現代史』 君島和彦 東京 ずずさわ書店 1996年

<付記>本稿考察は平成12年度宮崎学術振興財団研究事業助成金の補助を受けて収集した資料を使用したものである